女帝が愛した秘湯

山梨・早川町

山梨県早川町。町名の由来となった富士川の支流、早川が貫流し、町の96%が森林に覆われた深山幽谷の地。南アルプスの山々によって周囲と隔絶され、人口はわずか1277人（５月１日時点）と「日本一人口の少ない町」としても知られる。そんな「辺境の里」（辻一幸町長）に古代の女帝が数年にわたり移り住んだという伝説が残る。

主人公は第46代孝謙天皇。舞台は早川沿いに町の北端に位置する西山温泉と奈良田だ。

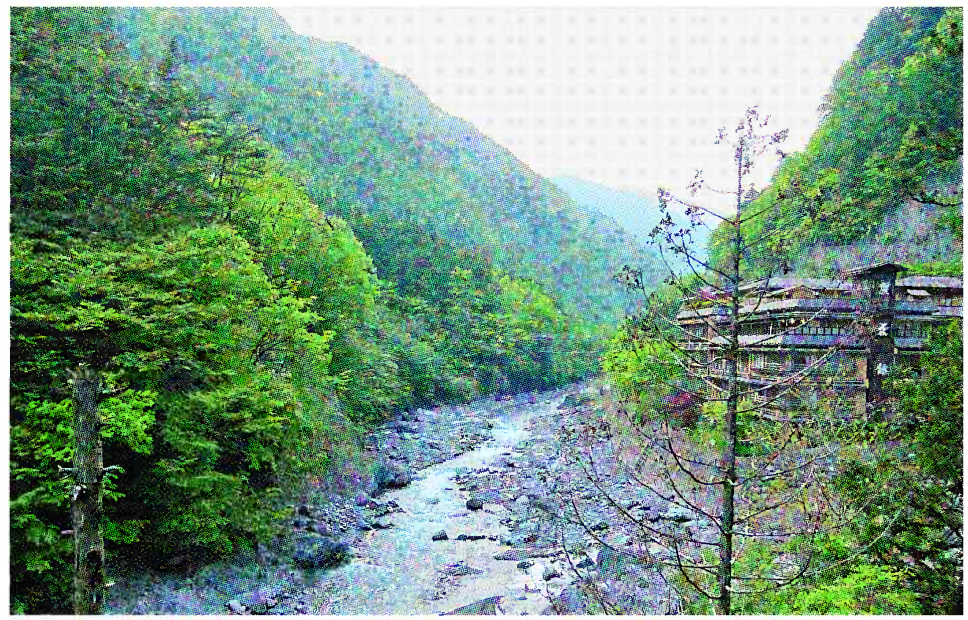
□　□

孝謙天皇は聖武天皇の皇女で、史上唯一の女性皇太子を経て 749年に即位。権謀術数の渦巻く奈良の都の権力闘争を勝ち抜き、いったん退位した後も第48代称徳天皇として再び即位した（ 764年）。生涯独身だったが、側近の僧、道鏡と恋仲になり、皇位を譲ろうとしたとされる古代史最大のスキャンダルの主人公としても知られる。

そんな古代有数の女帝がなぜ、都から遠く離れた山梨県の奥深い山里に移り住んだのか。

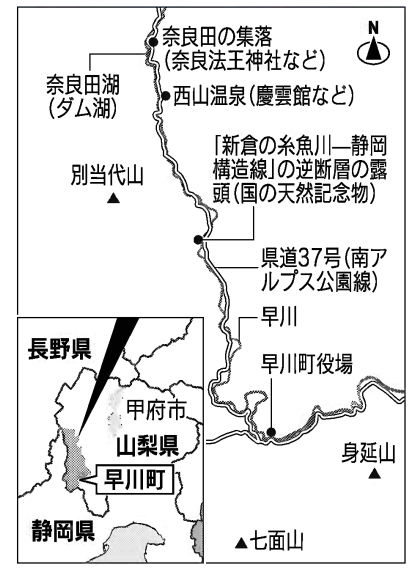
謎を解くカギは、西山温泉の伝統旅館「慶雲館」にある。慶雲館は 705年（慶雲２年）に創業した日本最古の旅館。この地に流れてきた藤原真人（藤原鎌足の長男）により温泉が発見され、創建されたという。「日本の長寿企業ランキング」では建設会社の金剛組に次ぐ２位ないし３位とされ、今年２月にはギネスブックから「世界最古の旅館・ホテル」に認定された。

この慶雲館に 758年、病を得た孝謙天皇が湯治に訪れ、20日間、湯につかって全快したという。伝承によると、退位して吉野で伏せっていた孝謙天皇の夢枕に白ひげのおきなが立ち「甲斐の国、白鳳の深山に、諸病に効ある霊泉あり」と告げた。孝謙天皇は70～80人のお供を連れて今の山梨県を目指し、慶雲館にたどり着いたという。



南アルプスの急しゅんな山々に囲まれて早川沿いに立地する慶雲館

奈良田の集落。関西なまりに似た方言も女帝伝説をしのばせる



山里に伝説、最古の旅館

真人から数えて52代目の当主である深沢雄二社長は「慶雲館はいにしえの伝説とともに生きてきた。1300年余にわたり創業以来の湯を守り続けられたのはＤＮＡのなせるわざ」と話す。

女帝伝説がより色濃く残るのが、さらに奥まったところにある奈良田だ。

この辺りは「秘境中の秘境」といわれ、山の緑と早川の清流が絶妙な美しさを織りなす。とりわけ新緑の季節は目にしみる。

伝承によると、霊泉を求めて険しい山道を進んだ孝謙天皇は、奈良田の集落に差し掛かったところで「おお、奈良の都は七条なるが、この地は七段。ここも真に奈良だ」と驚いた。

□　□

この地をいたく気に入った女帝は、集落の最上部に御殿を建てて数年遷居。以来、一帯は「奈良田」と呼ばれるようになり、地元の人々は女帝を「奈良王様」と呼んで敬愛したという。御殿跡とされる場所には孝謙天皇を祭神とする「奈良法王神社」が建立されている。

女帝にまつわる言い伝えも数多く、古来「奈良田の七不思議」として語り継がれている。また奈良田の言葉は甲州弁（山梨方言）とは異なる独特の方言で、「同じ早川町内であっても他の集落の人には通じない」（奈良田在住で郷土史に詳しい深沢実さん）。国語学者の金田一春彦はかつて「奈良田言葉は京言葉」と評し、地元で奈良田温泉「白根館」を営む深沢守社長も「アクセントは確かに関西風で、女帝伝説をしのばせる」と言う。

☆――旅支度

最寄り駅はＪＲ身延線身延駅。新宿駅から特急列車で約２時間半（甲府駅で乗り換え）。そこからバスでさらに約１時間半。奈良田行きのバスは１日に４往復しかなく、アクセスは便利とはいえないが、それも秘境の旅の醍醐味だろう。

焼き畑農業の貴重な資料も

バスは早川沿いを延々と走る。青々とした清流と眼前に迫る険しい山々を眺めながらの道中は、快適で飽きない。

奈良田には歴史民俗資料館があり、この地で戦後も行われていた焼き畑農業に関する貴重な資料を展示している。

慶雲館と奈良田の間は、徒歩で１時間弱の距離。早川の瀬音と鳥の鳴き声以外は何も聞こえず、すれ違う人もいない。女帝も行き来したであろうこの山深い細道を歩いていると、天平の都の政争から身を潜め、再即位の策と時期を探るのに絶好の地と女帝には映ったのだろうと、ふと思いついた。

（編集委員　中川内克行）

(C)日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。